

センター のあゆみ



ひと言 夏はめぐる

佐久間 徹 (センター運営委員)

目次

ひと言	佐久間 徹	1
特集	新たな高校入試制度を考える	
①	佐々木克敬さん (県教委) に聞く 新入試制度で何がどう変わるのか	2
②	中高現場教師に聞く 新入試制度をどう考えるか 遠藤理香子 大木 一彦 芳賀 郁雄 吉岐 史章 石田 一彦	5
	座談会を終えて	石田 一彦 13
	入試を前に親たちは?	14
	スイミー講座に参加して	樽見 郁子 15
	いま 子どもたちは いのちと向き合う4、5歳児	安達喜美子 16
	被災地の今と これから 学校の再建は地域の再生とともに 父そしてフクシマ	森 達 18 勝然たみ子 20
	第2期講座 戦後教育実践書を読む 「教師」(須田清著) を読んで	渡部やす子 21
	教室の報告 「けん玉」ってすごいんです	渋谷 信賢 22
	DVDの紹介	高橋 達郎 24
	センターの動き	24

題字：江島隆二 表紙写真：朝市センター保育園

わたしが教員になった1979年は障害児の全員就学が始まった年だった。けれども、その時点で義務教育の年限を超えていた障害者にとっては学校教育を受ける機会がなかったのです。今、その人たちが一定の制約はあるが、学校教育を受けることができるようになった。還暦を過ぎた方が孫のような世代といっしょに教室にいるときは本当に楽しそうだ。

しかしながら障害児学校は過大化・過密化の問題を抱えたまままだ。ようやく宮城県でも県立支援学校を増設することになったが、まだ解決は遠い。障害児教育では学校の設置基準がないため、子どもたちが増えると特別教室を普通教室に転用したり、校庭を削ってプレハブ校舎でごまかしてきたつけが現れている。障害児教育だけが不幸なのか？ 日本の経済力から考えても、通常の学級の人数は多い。教育費も異常に高い、等々……。

夏になるといやでも戦争のことを考える。敗戦の焼け野原で、「この国のあり方を変えなくては」と、みんなが平和で豊かな生活をつくりたいと願ったのではなかったのか？

夢が実現したときに一番恩恵を受けるはずだった人たちを置き去りにしていたことに気づいた。夢を叶わぬままにしておくのではなく、もう一回り大きな夢にしてみんなが追いかけていきたい。そんな思いを強くする夏だった。

特集 新たな高校入試制度を考える

① 佐々木克敬さん（県教委）に聞く

新入試制度で何がどう変わるのか

◆なぜ入試制度を変えたのか？

—これまでの制度を改めることにしたのはなぜですか。

一つ目は、生徒や保護者からは中学校長の推薦が得られるか否かで、受験機会の不公平感があるという声があったのです。中学校からは、校内推薦というのはいすく大変だ、特に仙台地区は大変だ、という声がずいぶんありました。加えて校内でセレクトすることが高校入試の手伝いになっているのではないかと。

二つ目は、受験生の多様化とか個性を見ようということ。推薦制が始まったのですが、実際には評定平均だけで合否が決まっていますのではないかとという声も出しました。このようなことも、推薦入試から前期選抜に改めるきっかけとなっています。

三つ目は、平成6年から普通科でも推薦を行っています。これが、定員の3割の推薦になっています。推薦された生徒は、ある程度、学力もあって特色のある生徒ですが、早期合格につながって、最後の中学校生活3ヶ月間（1月～3月）の学力の伸びが妨げられているのではないかとという指摘がありました。

—それは、主にどこからの声ですか。

それは、高校も中学校も両方です。もちろん、がんばっている子もいるのですが、中学校から推薦していただけてすく優秀だという生徒の伸びが今一だったりする例が見られたのです。

—専門学科に関しては？

専門学科の方は、目的を持っていて、部活でがんばろうとか、こういう資格を取ろうというような意欲のある生徒が結構多いと聞いています。どちらかというところ、目的意識が希薄なまま合格したいと思った生徒には伸び悩みの傾向が見られるようです。

—推薦入試以外の部分での課題というのは？

一般入試に関しては、大きな意見というのか、今の制度を改めたいという話にまでは至りませんでした。高校ごとの特徴を一般入試の部分でも出せないかという話は入学者選抜審議会などでは出されて、その方向になりました。

—高校ごとの特徴というのは、具体的には？

例えば、うちの学校は学力に少し重きを置きたいから学力検査の方に重きを置くとか、あるいはうちの高校は中学校での

来年度（平成25年度）の高校入試から、これまでの推薦、一般、2次募集という入試のあり方が、前期選抜、後期選抜（一般）、2次募集へと変わります。一番の違いは、推薦入試が廃止され、新たに前期選抜が導入される点です。前期選抜は、これまでの推薦入試とは異なり中学校長の推薦を必要としません。各高校が公表する「出願できる条件」を満たせば、誰でも受験できます。ところが、この7月に公表された前期選抜の各校の出願条件をみると、半数程度の高校がその条件に中学校の評定数値を示し、教育関係者や保護者の間で話題になりました。

本特集では、入試制度の策定にあたって県教育委員会に策定の経緯やねらいを伺うとともに、中・高の先生方に集まってもらい学校や子ども、保護者は今回の入試をどう受け止めているのか、現状を中心にお聞きしました。そこからどのような教育の姿や課題が見えてくるのか。今特集が、これからの入試を考え一つの材料になればと思っています。

（清岡）

んばりを評価したので調査書に重きを置くとか、そういうことがあってもいい。今はほぼ5対5の比率でやっていますが、そうじゃなくてもいいのではないかといいことですが。

——今回の入試制度の改定によって、具体的には何が変わってくるのですか。

中学校生活での目標設定がしやすくなり、そのがんばりを高校できちんと評価できるようになると思います。あとは、うちの学校はこんな生徒と学校づくりして行きたいということをお回の出願できる条件として示すことができるようになると思います。その意味で学校毎に出願条件も多様化しているかなと思います。

例えば、仙台二高だと、評定平均4.8という出願条件に注目が集まりますが、もう片方では4.3で東北大会出場という出願条件もある。つまり二本建てとなっているのです。仙台一高は、評定平均の条件なしで、とにかく自分で自己アピールできる者というくりです。自分の学校では、部活でこんなふうががんばっていた生徒がほしいとか、ボランティアでがんばっていた生徒がほしいというところが示せるようになったのかなと思います。このように、選抜の趣旨の第一義は、「受験生の多様な能力を多面的に評価する」ということを考えてのことなのですが、複数回受験を第一義的にとつての議論がすすめられているように思われます。

◆前期選抜のあり方を巡って

——今回の出願条件に評定数値を示している学校がずいぶん出ていますが、どんな議論があったのでしょうか。

この件については、高校や事務局が勝手に出したという誤解があります。実際には評定平均をきちんと示してもらわないと困るという話は、中学校側から出されていたのです。今までの推薦基準が曖昧だったことで、校内での選考や出願において混

乱があった。だから、保護者にも生徒にもきちんと説明できる基準を示してほしい、という要望です。

一昨年の春の案の段階では評定平均は出していない。きわめて優秀とか、優良とかいう言葉遣いであった。ところが、極めて優秀とか優良というのはどの位の値なんだ、具体的な値を示して欲しいと。そこで、評定平均を示しても良い学校は示すことにしました。

——推薦制でなくなれば、中学校は評定数値まで求めなくてもいいように思うのですが。

逆に条件がはつきりしていないと出願はできない、との声が多かったのです。極めて優秀と書いてあったものに対して、自分は極めて優秀と思って出願しても、資格に達していないと困るという不安が最後まで消えない。高校側は国、数、英の3教科の学力検査を行うし、評定値も加算するし、学校独自検査もあるので、出願を認めない基準を内部で厳密に設定することは意識していませんでした。

——今回の改定は、受験機会の公平性をどう確保するかが課題だったと思うんです。だとすると、例えば4.8という数値が出てしまうと、4.7の子はたった0.1の違いで受けられないわけですよ。

数値が出る前は、「程度」のような曖昧な基準は困るというところで明確にしたところ、今度は、それはそれで今の話のような意見も出てきた。勿論、「程度」のような示し方が良いのではという意見もありましたが、説明会等の際のアンケートでは明確化を望む声の方が多かったのです。

——この件については高校、中学、そこ別の例えば審議会とか、その他のいろんな場での議論はなかったんですか。

例えば、新入試説明会であったり、校長会であったりで説明をさせていただいてきました。その中でもいろいろな意見もあったが、アンケートなどでは、評定値を出してほしいという声

が大きかったのです。

——ところで、受験機会は公平になったと言えるのでしょうか。

前期選抜で中学校長推薦がなくなったという点では公平性が高まったと思われます。しかし、似たような選抜を数度行ってしまうと、合格する生徒像は似てしまう。そこで前期選抜の割合を2割まで絞り込みました。

——審議過程の中では前期、後期に分けないで一度の選抜でいいという意見はなかったんですか。

一度の選抜の方がいいんじゃないかという意見もありました。

——中学校の進路指導主事の7割以上がその方向がいいとアンケートでは回答しているんですね。

そうですね。ところが、保護者の7割が複数回の選抜を望んだ。このズレが、教育現場と保護者のズレです。一度の選抜で良いというのは中学校も高校もそこは一致していたと思います。

◆なぜ、前期選抜に学力検査を導入するのか

——それから前期選抜では、国、数、英の3教科について試験しますが、それはなぜですか。

中学校と高等学校の学習についての接続と、学力の保障です。中学校にしる高校にしる、勉強をきちんとして学力をつけてもらうというのが本筋です。本来は国、数、英だけではなくて、5教科や9教科を行えばいいのですが、前期の場合は国、数、英の学力を検査で見ても、理科、社会などは中学校から提出される調査書や学校の独自検査でフォローできるのでおちつきました。

——ちょっと前に戻りますが、評定数値を仙台一高などは出してないわけですね。その他にもずいぶんありますが、あれはあれでそのままになりますか。

はい。

——それについて中学校などからは、

今でも、評定平均値を示して欲しいという声は根強いんです。

そうしないと、倍率だけが高くなって、悪い意味で言えば記念受験、冷やかし受験になってしまうとの危惧もあるし、中学校としては、出してもらった方が目標設定しやすいとの話です。

——そうすると、中学校に入った時点で前期選抜を希望する子は、きちんと継続的に学習をしましょうということですか。

——中1の初めから評定数値を目指して学習するというのは、本来の教育とか学びからするとスレてませんか。

前期選抜の定員は2割で、8割の生徒は後期選抜です。どうしても前期選抜の2割に目を奪われてしまいますが、定員の軸足は後期選抜8割に動いたのです。前期選抜の方だけが大きく変わったので、その意図はなかなか伝わっていない。実際は後期選抜に向けてきちんと、こつこつと勉強していた生徒が、きちんと合格する。そこに気づいてもらうまで、たぶん数年かかるかもしれません。

◆高校入試のこれからについて

——今後高校入試のあり方が問われるかもしれませんね。

もう高校が全入の時代なので、小・中・高一貫して12年の教育を考えなければいけない時期です。小・中・高12年間学習させるという意識が必要です。小学校は小学校で終わり、中学校は中学校で終わり、高校は高校で終わりという分断的な話ではないのです。小・中・高の教育をトータルで考えていかなければいけない。また、多くの高校から国公立の大学、しかも難関大学に入っています。自分に合った学校に進学し、勉強をして大学に行くという



ことができるようになりはじめています。また、実業高校でも特徴ある取り組みで全国表彰を受けたり、資格取得での実績が上がっています。生徒にとっては、高校の特色づくりでいろいろな選択肢が広がっているのです。

— 選抜制度は来年から新しくなると言いながら、また次を考えておかなくてはダメですね。

入試制度にはこれがベストだというものはないのです。今ま

での課題については、今回の改定でクリアできるかなと思っています。ある程度クリアできたとしたら、また新たな課題が出てきたり、もつとよいものにするにはどうしたら良いかという議論に移っていくと思います。



② 中高現場教師に聞く 新入試制度をどう考えるか

〈座談会参加者〉

遠藤 理香子さん (中学教師)

大木 一彦さん (中学教師)

芳賀 郁雄さん (中学教師)

壺岐 史章さん (高校教師)

〈司会〉

石田 一彦さん (尚綱学院大学)

◆高校入試をどう見るか



石田 今回は、現場サイドでは新しい入試制度をどのように受け止めているかというところを中心にするかと思っています。当然、現場からということであれば、ご自身のご意見も含めてですけれども、特に、中学生、あるいはその保護者の気持ちなんかも含めながら出

していただきたいと思います。

芳賀 まず、推薦制度がなくなつたことはいいかなあとは思つたんですけども、一部の人間が聞いてきて伝



講するんですが、それでも伝えきれないところがある。うちの

学校ではもう9月あたりから調査書作成委員会を始めたらいんじゃないかと提起されています。

石田 生徒たちはどうですか。

芳賀 生徒たちはやっぱり前期選抜で、とにかく早く合格したいっていう意識があるので、インターネットを通して高校を出している資格条件なども見せました。ああいうのを見て、あんなの無理だと最初から数字に驚いています。私の

地区内E高校が、最初に出した「欠席ゼロ」に

「もうオレだめじゃん」とがっかりしているところなどありました。

遠藤 推薦がなくなつたのはいいことだと思つて



います。ただ、今まで、3年生の学年にこだわったわけではないですけども、中学校で大事にしてきた進路指導というの

は、本当に、自分の適性であるとか、将来の進路のことであるとか、その学校の特徴であるとか校風であるとか、様々なものを見て選びなさいって言うってきたにもかかわらず、ここにきて、「本当に大事なのは点数なんだよ」ってバアンと言われてしまったような気がして、それが非常に残念な気持ちでいます。

夏休みに三者面談やつたんです。実際に1学期に出た評定で不服を持った保護者と生徒が三

者面談をボイコットするとかありましたし、4点いくつなければダメなのに、これでは行けないと、ずっとその学校に入ろうと思つて勉強してきたのにこの評価では……。今まで確かに様々なことで中学校はクレームついてきたんですけれども、唯一評定に関してはそれほどなかったはずなんです。ところが今回は評定にまで不平を言ってくる保護者がいた。これは初めてのパターンじゃないかと思つています。それから新人戦とかで今話題になつていっているんですけども、水泳競技であるとかスキーであるとか、いわゆる競技人口の少ない部活動というのは一発で県大会なんです、地区大会を経ないで。すると、条件の中に「県大会に出場した者」ってなると未経験者でも行くこととするんです。

2月1日に前期日程をするっていうことは、本当に教科書が2月1日までに終わっていないければ前期日程の3教科が受けられないってことになりますよね。もっと計画を立てて、これは3学期で卒業間際にと取っておきたい教材っていうのも、私は国語ですが、あるんです。そういうのも無視して本当に12月までに終わらせなくちゃいけないっていう使命を持たされることにも今回の改定に不満を持っています。

石田 それまで積み重ねてきたものがどう表されるかじゃなくて、どういうふうにしたらうまく点数になるかという方にいつてしまうということですね。それを奨励する格好になるということ……。

芳賀 子どもの関係性も壊れるんですよね。県大

会に行くために、私はテニス部なんですけれども、登録が8名なんです、8名の中に入れるか入れないかっていうようなところでの問題も出て来っています。

石田 それが入試に直接つながるという点ではいろいろ差しざわりが出てくるわけですね。



大木 僕も、普通科の推薦入試がなくなつたのはまず良いと思つているんです。でも、工業とか農業とかまで一気になくす必要があつたのかどうか、これはまず保留にしたい。

なぜ普通科の推薦入試をなくして良かったのかというと、これは全て数の中で決まつてきた形だった。表向き総合的に評価すると言つていながら実際は内申点だけで殆ど決めてきた。でもそのことは僕らもはつきりいうことはできないし、親とか本人たちもよく分からないところから切られてきた。そういう不合理な制度がなくなつたのは良かったと思う。

でも、今度は今まで推薦入試で使つてきた評定を高校が露骨に出すことによつて剥き出しにしちゃつた。剥き出しにし説明責任を果たしたからよいかということになるが、これまで出たような問題が露骨に出てきて。内申点というのは、公平な学力を表す数字にはならないんです。学校ごとに格差があるし、学校によつて、5とか4とかの付け方は違うんだし、違つて当たり前なんです。僕らが評定をつけてるのは入試のために付けてるわけじゃないから。それをこんなに露骨に入試で使う制度にしたのは宮城

県だけなんですよ。

二高の4・8という数字は、ある教科で3年間3を続けると4・8を超えないんです。4・7いくつなので、3年間3だけの教科が一つでもあつたらもう駄目なんです。だからこう露骨に出していくことで、評定に対しての親御さんとかの関心も変な意味で高くなつていいる。あとは、県大会出場でも、さっきの話にもあつたけど、女子のスキーで東北大会とか県大会とかに行つて下までやつと滑つてくるだけでもある。他の県を見てると、例えば、この高校はこの三つの部活について力を入れていきたいからこの三つの部活について好成績を挙げた者に限るとか、あるいは、そのスポーツについての実技試験を課すとか、そこに高校が力を入れたいからやるっていうふうにしてるんです。それが良いかどうか分かんないけど、それだったら話は一応分かるんです。でも今回は全然関係ないんですよ。特徴あると言つてるけど、何部でもいいか



ら県大会に出れば良い、ベスト8になれば良い。そういう形で出しているから、じゃあそれをクリヤーした子はそこで育てて貰えるのかというとそうではなくて、こういう出し方をしたら自分がどういうふうにすり抜ければ行けるか、自分の子どもはどうやったところを抜けていけるかと、みんながせせこましく考えていくようになる。

◆評定数値をめくって

石田 私もたまたま評定値の一覧表を見たのですが、高校の評定値を公にしているっていうのにびっくりしたんですけど。

大木 一覧表になってはいるわけではなく個別なんだが、簡単に一覧表にできるので僕もしてるんだけど、同じものは塾も出してるんですね。そうすると、4・5だからここは受けられるという使えない4・5だからここは受けられるという使い方をしていくんですよ。

遠藤 ある高校は今までは内規で出してこなかったけれども、それでやってきた評定値をただ表に出しただけと話している学校もあります。でも一つ一つ昨年までの調査書等作成委員会を出してきていた、いわゆる推薦の平均値と比べてみると、上位のと言ったら語弊があるんですけども、高校は、あまり変わりはないんです。で、中間層の学校は今までと随分違うんです。今まで例えば3点いくつとかで推薦で合格していた学校が、今回4点いくつとかすごく上がっているんです。その評定値を見た時に違和感を

もちました。本当に2割しか取らないっていうのもありますし、ここでぐっと上げるというのは一気にこの制度を使って、自分の高校に入ってくる生徒の質を上げようっていう気持ちの表れなのかなとも読めるし、「前期だけだよ」とはいうけれども、この評定値によって、後期を狙っている子どもたちもこの位のレベルでないと自分は受けられないのか、去年までと全然違うんじゃないと、ますます敬遠して自分のランクを下げよう、下げようとする動きというのもあって、特に中間層の学校へ入ろうとしていた子どもたちの不安感が今とつても高まっているかなって気がします。

石田 今まで中学校の方の話をしていただきましたけれども、今度は実際に受け入れる側の高校としてですね、なかなか話しにくいところもあると思うんですけども、今回のこのシステムについてどんなふうな思いを持っていらっしやるか。



吉岐 現場の教員は、特に入試制度を変えようという声を積極的に出しているわけでもない。いつもこうやって県教委からきて変わるといいうのが実際の動きです。我々は言われたことに対応するっていうんですか、今まで例えば推薦でやってきたその枠っていうのが今度前期選抜の枠に代わり、例えば3割から2割の枠って言った時に、大体今までの水準と照らし合わせて適切なラインを言われたままに決めるというふうなところで、大方の学校はこれまで



の実績をもとに対応していると思います。なるべく具体的に決めるといいう話がありましたので、概ね具体的に数値化しているというのが多くの学校だと思えます。でもこういうふうに出ると、これが高校ランクに見えるんです。だからあんまり低い評定を出す自分の高校はこれだけだというふうに自ら証明するみたいになるので、どうしても中間校は頑張っちゃうんじゃないかなと推測します。

◆学校独自問題はどうか

吉岐 いずれにしても、現場としては今まで推薦で、かなり平均評定というものがメインになってきたっていうところに、今度は、3教科の入試の業務がプラスになり、しかも学校独自の問題まで作成して（前から作っていたっていう学校も多いんですけども）、それが今度75点という明確な点をつけるという指示までできてやるので、学校独自問題での公平な採点、小論文を中心とするもので75点に点をつけると言われる

と実は大変困るんじゃないかなと思います。今までは例えば学校によっては小論文の評価なんかは、A、B、Cぐらいにして、内申点の横に書いておいて、あと微妙なところでちよっと見るか見ないかっていうところをやっていたところも多いと思うんです。ですから今度75点にしろって言われた時に、明らかに、文章の採点として、個性がいろいろ出で点の付けようがないようなものに点を付けて、しかもそれが合否に直結するってことになるので、これは現場としては大変神経を使うことになりました。

いずれにしても、高校としては業務がプラスになって、しかも公平な入試になるかどうか、かなり不安があります。

石田 中学生にとっては、特に小論文なんていうことになるときついかなと思うんですけども。

大木 子どもたちは、作文とか小論文とか面接ってあれば全部やってくれているんですけど、言ってくるから対応はするけど、今までから言うところ、点数を高校側で本当に差をつけるかどうかというのが分からないですよ。

吉岐 小論文とか作文とは言え、今までも点数を明確にするために小さな問いをたくさん設け、そこに配点をして、要するに普通の国語なり理科なりの問題のように、かなり作ってきて、それによって公平な採点を担保しようという動きはあったので、75点と言われた場合にはその動きもしつかり入ってくる部分はあると思いますね。

石田 柱は三つですよ。調査書とそれから学力検査とそれから学校独自検査。評定値は出しませんが、なお且つその中でこの学校独自検査っていうので選抜というかピックアップしていくという、つまり高校としてそれぞれ独自の物差しを持つてやるということになる……。

吉岐 例えば、理数科であれば、いわゆる理科、数学的な考察力を問うような問題を出すと、そういうようなことで、適正っていうんですかね、いわゆる理数的なものの方ができるかどうかっていうのを見るなんてことは、当然やるわけですね。

大木 今回は評定値の外に3教科のペーパーテストの点数が出るじゃないですか。意外と点数はばらけるはずなんです。そうすると高校独自のところでそんなに差をつけなくてもいい。だから高校独自の問題が本当にどれだけ意味を持つことになるのかなあっていうのは分からない。

◆新制度による様々な影響・変化

石田 今、大体高校への進学率が90%台の後半、殆ど100に近い形でいってますよね。あと、大学の入学なんかでも、大学と短大入れると大体5割超えていて、専門学校を入れると7割超えていると言われる。そういう点では、多くの人たちが学習する機会を持ちたいと願っている。そういうなかでの今回の高校入試制度、果たして中等教育全体の視点から見るとどんなふうに考えていますか。

大木 今回は中1の評価から入ってくるし、中1の出席日数も入ってくることになる。だから、中学校に入った時から高校入試に向けて努力していなければ、前期選抜にはあなたは資格はないよってことになってくるじゃないですか。1年生の時は少しのんびりさせて2年ぐらいから発破かけようと思つてた保護者も、家庭訪問で、どう対応したらいいとか、塾に行かせた方がいいかどうかとか、そういう話とかがどんどん増えてるっていうのは実感としてありますよね。

石田 そうすると子どもたちの将来っていうのもあまり長いスパンでなく短く見ていく、子どもたち同士の関係性が壊れていくっていうことですよ。そういうことを考えた時に、子どもの育ちっていうか、そういう点からすると、子どもたちが追い立てられているっていうか。

大木 二華中とか青陵とか中高一貫校の受験もほんぶん入って来ているから、小学校からそういう生活にさらされるみたいなのは多くなつてきますよね。ただ、あんまりそういうのに関係なく生きてる子だと、中学校に入るまではのんびり過ごしてきて、中学校に入ったらいきなり5段階の数字がついてくる。それでも高校入試の可能性が限られ、本人がどこの高校に行こうかなと考える前にシャットアウトされていく。親御さんはこういうの情報を見ながら、「ああ、もうやばいなあ」とか「うちの子はもうこの時点で終わったなあ」とか。中1の子あたりだったら、まだ自覚を持つ前ところで事実上前期

選抜の資格は失っていく。そういう感じはありますよね。

石田 もう一つ前期選抜のやり方で気になるのは、最終的には自分で判断しろっていう形ですよ。なんか、自己責任っていう感じが非常に強くなっている。そんなことありませんか。

大木 今までも自分で決めるんだよっていうことは言ってきたんです。遠藤先生がおっしゃっていたみたいに、もっといろんなことを考えて自分で決めるんだよって言った。でも、今度は自分で決めるといつても自分で数字見て当てはまるかどうか決めるっていうふうになる。今度は、もし前期選抜受けて駄目だった時には、3教科のペーパーテスト受けて落ちるので、駄目だったのは自分のせいだ。推薦で駄目だった子よりは、前期選抜を受けて駄目だった子は自己責任が強くなるのは確かですね。

芳賀 今回、条件が出て、去年と今年の傾向の違いは、去年ですと本当に限られた二つ三つぐらいの学校に分れたのが、今回はもう角田のはじつこの所から仙台もあれば白石もあれば亘理もあれば岩沼もあるみたいな感じで、最初の希望を取った時に広がっていました。で、夏休みのオープンキャンパスに行ってみて、「どうだ」と聞いたら「やめます」とか、そういうのがあります。

今までは、K高校に行つて、そこでスポーツやったり文化的のをやったりとかしてきた。そしてG高校、そこは就職の指導を一杯やってくれるところなんです。ほんの僅か親の学力が



高かったり経済力があつたりする者が仙台方面に行くっていうのがあつたんです。子どもたちはインターネットを開いて見て「N高校はこうだ」とか自分たちで高校を比較できるようになつたんですね。それでいろいろ情報を得て、もうちょっと違う所にも行けるんじゃないかと思う。広がつたんだと思います。

石田 その場合は、インターネットとかいうものはもちろん見えるわけですけども、それで実際の自分がどの高校に行つて勉強するのかと、どうつながっているのかというあたりはどうなんでしょう。そんなに広がってくるか。

芳賀 うちの学校なんかでもね、例えば三桜高の合唱が素晴らしいとかいうのを聞いてそっちに魅力を感じるとかはいるんです。また、野球が強かったりするものですから、私立高校も含めて部活動のところで行つてみようとかあります。

大木 例えば、Kが4・0で、Gが3・0とかと評定で出てきた時に、間に3・2とか3・4とか3・6とかいろんな学校があつたりすると、じゃ3・2とか3・4とか3・5の学校はどうなんだろうかと思うかも。高校ランクみたいに出ていますよね。だから、ここだったら自分を入れるかもしれないって思つて調べて行つて、通えたらそこに行つてみようとか、そういう感じは当然出て来るんじゃないですか。

このように評定数値が出てくると、高校のランクみたいにはつきりしちゃうから、通えないこともないから、自分で行けるのはここだ。って感じの使い方は当然してきますよね。

石田 つまりそうすると、どの高校がいいかっていうこともさることながら、その評定値の点数でここなら行けそうとかここは難しそうとか、そういう判断になつちゃうということですね。今の中学生が、そういうことについて自分で、ここだ、あそこだ。っていうふうには判断できません。

か。

大木 できますかっていうか、しなくちゃいけない。その時期が来たらしなくちゃいけないからするということなんじゃないですか。それだけ熟してるかどうかではなくて、もう最終的にはそうなるからそうだったらそこでやるってことになる。

だから、制度改革に賛成とか反対とかじゃなくて、変わったならそれに合わせてどうするってことしかないから、その時期に来たら、「じゃあどうするかなあ」とやるだけなんだと思うんです。

石田 さつきから気になってるのは、やっぱりシステムそのものがだんだん大学入試に近づいているなっていう気がしてしょうがないんですよ。ちよどミニニ大学入試っていう感じがする。いずれ人生は選択するわけですけども、まだまだいろんなことを吸収しながら伸びていかなくちやいけないときに、もう中学段階で決めなくちやいけないっていうのは……。しかも、調査書と評定値と面接とかっていう形も含めて、非常に大学入試に近づいて来ているなと。

◆前期選抜の位置づけをめぐって

遠藤 私は今回の制度は、やはり大学の進学率をよくするために、入れたんだなというふうに感じます。高校の保護者向け説明会も去年あたり随分各地区や学校であったんですが、県教委は、前期ではなく後期の方でより多くの子どもたちを選んでもらえるための制度にしたんだと言っ

てたんですね。前期の方はあるけれども、むしろいろいろなことを考えて充実した中学校生活を送って後期選抜の方で上がってくる子どもたちの方に自分たちは重きを置いてるっていうふうに話したんです。でも、子どもたちや保護者は後期ではなくて、やはり前期の方に目がいきます。県教委が言うように考えているのであれば狙いは失敗だったんだろうと思う。子どもたちの自由な、そしていろいろなことを考え想像力の豊かな発達をさせながら、中学校の三年間、高校の三年間を過ごさせましようという願いと大きく違った制度になってしまっているんじゃないかなという気はします。

大木 保護者向けにそういう説明をしたんだと思うんだけど、はつきり県教委が前に出したのは、高校の核になる子ども2割を前もって取らせてほしいということ。その他大勢の子どもには80%の枠があるからそこで自分で自由に受けて入っていらっしやいっていう、そういうシステムだと思っんです。だから、後期選抜に力を入れるんだしたら100%後期選抜にすればいいんだから。

遠藤 今回の三者面談でも話題になったんですが、ある高校は前期で入ってきた20%の子どもだけでクラスを作ると。それが一番話題になっていました。あまりにもひどくて露骨ですね。ある子は、その学校の、評定値はゆうに超えているんですが、自分は別に大学進学を考えていないので、その高校には入りたくないけど、20%の枠には入りたくないから違う科を受けたいん

だという。そういう制度にむしろ悩んでいるような三者面談がありました。

石田 高校側としてどうですか、

吉岐 現場教員としては、後期一発というか、一般入試だけでいいんです。合格できる人数は同じなんだから、一回やろうが二回やろうが、合格チャンスが増える訳ではない。受験回数が増えるだけで、合格チャンスは同じなんですよね。現場教員のレベルで言えば、私は理科なんです。科学室なんかで隣の教員と話すときには、「それ（一発入試）、本当はいいんだよね。でも県教委は我々のいうこと聞いたこと一度もないから」っていう話になります。

石田 職場ではそういう一発勝負で良いって考えている先生が多い？

吉岐 全員かどうかは知りませんが、周辺にいる人たちとは大体そんな話です。

大木 それはもう統計データで中学校の教員も一発勝負で良いって答えてるんです。でも県教委は、それは中学校も高校も自分が楽したいからそんなこと言ってるだけだっって分析して、親も保護者も受験回数が多い方がいいって言っつんだから、最初から受験回数は多くするっていうことで、議論を始めてる。

さっきの、ある学校で前期選抜だけでクラスを編成するというの、許されるんですかね。前期選抜だけでクラスを作るって、県教委として認めるのかなあ、本当に。

吉岐 仮に作ったにしても、その高校に前期で受かった子どもたちは変な意味でエリート意識持

ちゃんと高校のどういふところの文化活動が秀でていて自分がそこに行きたいためにとか、大事にしてきた今までの進路指導というのにもNOを言われたような気がして非常に嫌だなという気持ちがあります。去年群馬県に出張した折、中学校の校長先生のお話で、来年からの制度の話をしたら、「その制度は数年前群馬でもやっていたいました。そのうち評定にまでいろいろクレームをつけてきますよ。それがいろんなところから問題が出てきて、結局は後期の一発勝負になりました。それはもう5、6年前の話です。今からやれば10年はつづきますよ」と言われたんです。

大木 県教委は、前期選抜がこう出されたことによつて、実際に受けようとしてダメだったとか、受ける前にあきらめたことによつて傷ついてその後期選抜を受けることになるというふうなことをちゃんとイメージできてないんですよね。今までと同じように受けられるから、何も変わっていないからいいじゃないですか。

石田 私は大学なので高校格差の問題が言われている、それはそれとして、一応出される評定値とその面接とかでやってきたんです。けれども段々崩れてきて、今は基礎学力テストという名のもとに、もう一つ格差を緩和するものとして使っているわけです。でも、こんなふうな評定値をみると、ここまで来たんだなという感じがします。

大木 本当は親御さんが2回、要するに受験回数が多い方がいいと思つていふところを変えてい

かないとダメなんだなということですよ。1回よりも2回の方が確率が高くなると思つていふところを説得していかないと。結局、中学校と高校の多くの教員は一発勝負でいいと思つているんですよ。それはデータでも出てる。でも、一般の保護者とか生徒は1回よりは2回受けた方が可能性が高くなると思つていふ。募集定員が変わらないんだから変わらないんだよと言つても、そこがやっぱりわかつてもらえてないというところですよ。

遠藤 少しでも直すとすれば、まずは、評定平均値をすべての前期のところからなくすということがいいんじゃないでしょうか。5段階評定の条件をすべてなくすというのが、まず一番最初にやつてほしいことですね。

大木 評定は、客観的な数値でないということは推薦入試でわかっているんだから。そのダメだとわかつていふ数値をよりいっそう使うようになつちゃうんだから、そこは矛盾しているからそこはきちんとしてほしいですよ。

芳賀 それを補うのが3教科の試験なんですよ。吉岐 ただ2割しか取らないというラインを変えないと、結局全員が好きなのところを受けたとして2割以外は全員落ちるんですよ。不合格者をものすごくたくさん出す制度になつてしまふ。評定平均値をなくすということ、やっぱり定員というんですかね。前期で全部取つちゃうともいい。そうしたら一発入試ですけど。不合格者をいっぱい出さないような手として、県はこういうやり方をとつてきたわけです。評定

平均値をなくし、例えば5割ぐらいとか8割ぐらいとか、前期で取つてしまふぐらいな合わせ技をちよつと考えないといけないかなという気がするんですけどね。

石田 子どもたちがいろんな社会で生きていく。その時に、どういふ力をつけることがいいのかと考えた時にもう一回高校入試のあり方というのを本当は考えてもらいたいと思つていふんです。これだと本当に、結果的にはどんだんどん狭い世界に追い込まれていくという感じがしてしょうがないんですけどね。

大木 結果としてどういふ制度になるかということもあるんですけど、宮城県にぜひお願いしたいのは入試制度の検討にちゃんと中学校と高校の現場の教員をもつとたくさんいれて、よく現実を知つていふ人たちが議論させてほしい。最



近見ていて、山形とかは普通科の推薦入試だけをやめるといふ形の改革で納めたんですよ。それは、それで納得いくんです。茨城あたりでは特色選抜みたいな感じで、「うちの高校はこの部活とこの部活とこの部活に力を入れたから」といふ形で、その部活の好成績を上げた子とか、その部活についてだけ実技試験をやったりしてそれでクリアした子は取るし、そのラインをクリアしなかった子はペーパーテストで合

格ラインに入っていれば同じように取るというふうになっている。それはそれでわかる。

石田 ダメダメと言っただけで終わらず、これよりはもうちょよつとこうした方がいいんじゃないかとかを出しながらよく変えていくことをみんなで追求していききたいものです。

じゃあ時間が来ましたので、これで終わりにします。

座談会を終えて

石田 一彦

高校入試という、もう半世紀前のことになりましたが、私はやはり自分自身のそのときが思い出されます。戦後の教育改革や新しい中等教育制度の誕生と重ねながら、話を進めていきたいと思います。

戦後まもなくの一九四七年（昭和22年）の学校教育法の制定によって、新しい教育制度がスタートしました。いわゆる六三三制の誕生です。特にその中でも、中等教育制度の改革は大きな柱となりました。そこには、戦前の階層的で閉鎖的な複線型の教育体系の反省の上に立って、「能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利」（憲法26条）の保障がもっとも色濃く反映されているといえます。

戦後は前期中等教育は中学校で、後期中等教育は高等学校でそれぞれ行うこととなりました。高校は高等普通教育と専門教育の2つを目的とし、高校三原則の理念のもとに発足していま

す。それは高校教育制度の民主化についての3つの基本原則、すなわち（1）総合制、（2）男女共学、（3）小学区制をさします。

もともと高校三原則の考え方は、進路の選択や地域の状況あるいは男女の別によって進学を希望する者の教育要求が差別的な扱いを受けないよう、その権利を保障する内容と制度をめざすことを基本にしていました。しかし一九五〇年代後半以降、高校三原則が崩れはじめ、一九六〇年代には能力主義の原理に基づき後期中等教育の多様化、細分化が進行していきました。

そうした全国的な趨勢のなか、北海道と東京都は六〇年代のはじめまで高校三原則、とりわけ小学区制を堅持していました。「十五の春を泣かせない」は、当時の蜷川京都府知事の有名なことばです。私はそれを経験した最後の世代の一人といえるでしょう。全道一斉の高校入試の結果をもとに合格ラインを設定し、



それをクリアした者を地元の高校に入学させるといふ制度です。したがってどの高校を受験したらよいか、受験生やその家族が頭を悩ませる必要がないのです。生来のんびり屋で、成長もゆつくりだった私には、とてもありがたいシステムでした。

それから50年、時代の変化とはいえ、日本の教育は大きく様変わりしました。子どもの権利委員会の勧告でも早くから、教育制度の競争主義的な性格がいじめ、情緒的障害、登校拒否・不登校、中退・自殺の原因と指摘されてきましたが、その傾向は21世紀に入ってからますます強まっています。すべての国民に教育を受ける権利を名実ともに保障する教育制度から次第に離れて、エリートと早期選別に重点をおいた教育体制へと比重を移しています。

それを典型的に象徴しているのが、中等教育です。その一つは、

入試を前に親たちは？

◆ 3年の親は、意外に冷静なんじゃないかな。それぞれの学校の出願条件（評定平均）が出たけど、もう今さらっていう感じかな。もうじけたとしてもね、どうしようもないしね。それよりも、今の1年生や2年生の親の方が慌てているんじゃないかなあ。仙台二高とか評定4.8とか出てたけど、もともと推薦の時から二高は評定平均5ないと受からないって言われてたから、それ考えれば、その数値が表に出たという感じかな。私自身は、今回の方がすっきりしているかなと思ったりするけど。

(中3 保護者)

中高一貫の中等教育学校の新設であり、もう一つは、高校入試制度の変質です。それはいずれも子どもに競争を強いるものであり、いじめや不登校、自殺の増加の大きな要因となっています。彼らが直面している困難さは、その広さと重さにおいて重大な局面を迎えています。

いまや高校進学率は98%に達しています。しかも少子化が進行中です。子ども一人ひとりを大切に、長いスパン（見通し）で育てていこうというのが、親たちの本当の気持ちではないでしょうか。閉鎖的で差別的な戦前の教育の反省のうえに立って、一人ひとりの幸福追求の権利の実現（憲法13条）をめざす教育への転換が求められています。

(高綱学院大学 センター運営委員)

◆ 夏休みに二者面談があったけど、特に入試に關しては話なかったなあ。それより1年生の時に学校から入試が変わりますって資料を渡された。入試の回数が増えてチャンスが増えるんだとその時は思ったけど、実はそうじゃないんだって思った。出願条件の評定数値とか厳しいよね。部活がんばってますではダメでしょ。高校でいい生徒を取りたいだけの入試なのかな。なんか数値でこうやってみられるのは怖い。ある親御さんと話したときに、前期選抜はダメだから、後期選抜でやるしかないかなって話になった。部活中途半端ではダメだと思うと、もう部活はやめて勉強させた方がなんて思ったりもする。

(中2 保護者)

◆ 今回が初めての高校入試なので、新しい入試制度がどうかと言われたも、以前と比べてどうこう言えないし、まあこういうもんなんだろうと思って受け止めています。塾の先生からは、前期選抜より後期選抜の一般入試を中心に考えていきましようと言われた。実際に今の息子の評定平均は希望校の数値を満たしていないので、これからのがんばり次第なのかなあ。自分の時に比べて息子はずいぶん頑張っていると思うので、それが結果として出ればいいのと思っています。気持ちとしては、前期選抜も受けられるなら受けたという気持ちはありますよね。最近、希望校を変えて前期選抜をという思いも本人の中にあたりするようです。(中3 保護者)

◆ 新しい入試制度になるのは知っているけど、どういうふうになるのかはよくわからないわ。先生の話だと、推薦入試がなくなつて前期選抜になるってきいてるけど、これまですと変わらないっていうような話してた。また下の子1年だからよくわからないんだけど、親たちはどうなるのか具体的に知りたいって思っているんじゃないかな。

(中1 保護者)

◆ 7月夏休みに入つての面談の時に、「前期選抜を希望されませんか」と担任の先生に聞かれたので「はい」と答えると、それでは「メモを用意してください」と言われて、2年次の評定平均を教えてください。推薦の時は、落ちてても何で落とされたのか。評定が低かつたからなのか何なのかよくわからなかつたけど、それがなくなつて明確になつたのはいいかのな。今の心境は入試制度がどうかということより、我が子がどうかかな。親は、まあ成績がよくても悩むし、悪くても悩むのよ。

(中3 保護者)

スイミー講座に参加して

樽見郁子

毎年、夏休みに開催されるスイミー講座。今年は、8月3日(金)、国語の講座とインカ帝国展から学ぶ講座が開かれました。どちらも内容が濃く、もつと学びたいと感じる良い内容でした。

午前の部は、宮城県教職員組合執行委員長の高橋達郎先生を講師に『国語・物語文の読み取りの授業』について学びました。

達郎先生の求めるものは、集団思考のある授業です。特に物語文の読み取りの授業は、子ども一人ひとりが自分の疑問や意見を出せて、学習が苦手な子どもも活躍できること。また教師が、子どもたちの意見を大切に引き上げることによって「学び合い」が成立しやすいと話されました。ではどうやって……

①自学する子を育て、疑問や読み取ったこと、感想などを書いて授業に臨む子どもを育てる。②授業は、教師主導にせず、子どもたちの疑問を大切に、子どもたちがすすめる。教師主導では、子どもたちは教師の意に沿った解答をしようとしてしまう。友達の出した疑問なら、解

決のために様々な考えが出されるといふのです。

また、子どもたちの授業での姿を家庭にも知らせる学級だよりも出されていきました。先生が感心したこと家族にも知らせる熱心が子どもたちに伝わって、子どもたちの意欲を高め、学習も生活も変えることになつていくのだと感じました。

次に、模擬授業形式で、新美南吉の「さるとさむらい」を一読総合法で読み取りました。

生徒になつたつもりで意見を言おうとしましたが、なかなか言えず、発言する人の

勇氣に拍手を送りました。教師の発問と教材研究の大切さを再確認しました。

読み取りの授業が、学級作りにもつながり、どのような子どもたちを育てたいのか、教師の役割を考えさせられた奥の深い内容でした。



夏休み明けの授業を頑張ろうと、明るく前向きな気持ちになりました。

午後の部は、仙台市博物館において、いにしへの歴史に学ぶと題して、インカ帝国・マチピチュ発見について学びました。学芸員の先生に説明していただいて、おおよそのインカの歴史、インカ帝国はおおよそ百年で南北4000キロメートルに及ぶ広大な土地を支配したが、1532年にスペインに滅ぼされたこと、文字がなくキープと呼ばれる縄の結び目で情報を記録したことなどについて知りました。その後、壺や器や布などの生活用品や装飾品、ミイラ、キープなどを興味深く見学しました。

どうして栄えていたインカ帝国が170名ほどのスペイン人に滅ぼされたのかという疑問が残りました。予備知識を得て展示内容をよく理解することができ、有意義な学習をすることができました。

(仙台・桂小学校)

いのちと向き合う4、5歳児



安達 喜美子



夏合宿の中で

朝市センター保育園では、4、5歳児の夏に蔵王自然の家で1泊2日の合宿を行います。4歳児にとっては親元を離れての初めての合宿。事前に夜の保育園で夕ご飯を作って屋上で食べたり、保育園の近くの銭湯に行ってみるなど入ったりと、特別な準備を重ねて本番の合宿に臨みます。「蔵王に行くの、どうしようかなあ」不安と期待に揺れる4歳児に対して、一度経験している5歳児は「すごく楽しいから。」俺たちが教えてやるから。」と余裕たっぷり、自信满满。

夏の合宿のメインは何と言ってもニジマスのつかみ取り体験です。今年も蔵王に到着するとさっそく20人の小さな足が、木の根の隆起や笹竹を踏みしめニジマスを目指して山道を進みます。ほどなく野趣あふれるニジマスの沢に到着。目の前の流れを矢のように泳ぐニジマスに一齐に挑みかかる20人は、谷川の水の冷たさも全く気になりません。全身のあらゆる感覚が一匹のニジマスに集中しているのです。石と石の隙間に逃げ込んだ黒い影をすばやく両手で挟むと同時に、身をよじるぬるぬるしたその獲物をにぎって離さず力を加減しながら目をふさぐ。と、

魔法にかかったように手の中の獲物は動きを失います。そこをすかさず河原の石にバシッと頭を打ちつけ気絶させたところで、銀色の腹に小刀を入れ腹わたを取り出し流水で洗います。そうして串に刺して塩をバツバツと振りかけて炭火で焼きますと、あたりには食欲をそそる香ばしい焼き魚の香りが立ち込め、炭火のまわりは押すな押すなの人だかり……。

さっきまでどうしても捕まえたくて必死に追いかけていたニジマス。ついに捕まえることができてとってもうれしかったその魚は、手の中でびくびくしていたけれど、たちまち腹を割かれ串に刺され焼かれます。この場面では「いやだ、いやだ」と泣き出す子もいます。衝撃と葛藤で激しく波打つ心の音がぎゅつとつないだ手の中から伝わってきます。それでも、やがて焼かれた魚はその子の手の中に握られています。私たち人間も、自然が育んだ他の生き物の命をいただきますながら生きているという現実をリアルに捉える瞬間です。

顔に群がる虫を払いのけながら登ったり下ったり山歩き、手作りの小さなキャンドルの明りを頼りに闇夜の道を進む真つ暗探検と、夏合宿のワイルドなメニューは続きます。「年中さんは真ん中に入っで。俺たちが前と後ろで守るから。」と5歳児。仲

間の声や繋いだ手が一段と頼もしく感じる夏合宿です。

2歳の時に大きな病気をして1年間入院生活を送ったH君も、今回初めての合宿に参加しました。みんなの歩くペースについていけなくてべそをかくこともしばしばでしたが、子どもたちだけの夜を過ごして迎えた合宿の朝は、「みんなー、朝だよー。」と、晴れやかな声で起床の時を告げて回りました。それは、大きな仕事を成し遂げ満足感に満ちあふれた人の声でした。

サツマイモが……ない!

さまざまな合宿のドラマを胸に保育園の日常に戻って数週間後、今度は春に植えたサツマイモの畑に足を運びました。JR仙山線に揺られて25分、降り立った駅から30分の道のりの先に、保育園の畑があります。大きく成長したサツマイモが「にっこり」迎えてくれるものと誰もが期待して辿り着いた畑。しかし、そこで子どもたちが目にした光景は……なんと、サツマイモの根元が掘り返され食い散らされているではありませんか。春に100本も植えたはずのサツマイモの苗。わずかに10本程度が細々と残っているというありさま。「ここに植えたのに……ない。」誰がやったんだ?」驚きと失望の悲鳴が上がります。「そういえば、タヌキやハクビシンが出てきているって近所の人が言っていたなあ。」と保育士が話し出すと、「ちくしょー、タヌキめ。」と一齐に害獣を非難する声飛び交います。自然の営みと向き合う時、人間の都合ばかりが通るわけではなく、うなだれる保育士を前に、「山の食べ物がなくなっただんじやないの?」「みんな食べちゃ悪いから

つて、10本は残しておいてくれたんじゃないの？」と子どもたちの小さな胸は懸命に立ち直ろうとしていました。そして、その日はもう一つの畑に大根の種をまいて「山の神様、どうか大根を守ってください。」とお願いの言葉を唱えて帰途につきました。秋に大根を収穫したら、切り干し大根や、塩麴で漬物にしたりするのだそうです。

豊かな育ちをはぐくむために

保育園の生活は、子どもたちの様々な感情や知恵や行動を引き出しながら過ぎていきます。夢中になって遊ぶたっぷりとした子どもの時間の中で、一人ひとりが様々なこだわりを見せたり、ユニークなアイデアを思いついたり、友達と激しくぶつかり合ったりします。ありのままの姿を安心して出し、大人や仲間たちに存分に受け止められることで、自分の中に価値ある自分を見出していきます。そして「もっと大きくなりたい」「すてきな自分になりたい」と外からの押し付けではない内面に湧き上がる意欲や思いやりが豊かに育っていくのだと思うのです。

私たち保育士は、日々、生活を子どもたちと丸ごと体験し、その中で子どもが何を面白がっているのか？ 不安に思っているのか？ と子どもの心を探りながら保護者と共有する努力を積み重ねています。

しかし一方で、忙しい共働きのわずかな時間を割いて習い事に通わせる家庭が増えました。スイミングやピアノ、バレエ、英会話、体操教室、お習字などなど。自宅ではDVDで「シマジロウ」と楽しく寝やお勉強といった具合です。自己責任と競争の社会の現実を身に染みて感じている親は、少しでもできることを増やしておいてあげたいと思うので

しょう。でもそれは、人よりも早くたくさん「できる自分」が評価されるという価値観の中に投げ込まれるということ。折しも、「子ども・子育て新システム」の導入が議論される中、「幼保一体化で教育の充実」がクローズアップされるようになり、心配なのは、義務教育以降の教育の基礎を準備するのが、幼児期の「教育」の中心的な機能だとしている点です。生活の中で子どもたちの興味や関心を手掛かりに、物事の仕組みやあり方、仲間との関わりの中で見えてくる自分自身の心のありようを学ぶ場としての幼児期ではなく、学校での教科学習や生活スタイルを先取りする「就学準備」の場になってしまいはしないか？ という懸念です。

今年、小学校に入学した卒園児のT君。今でも「T君のように竹馬うまくになりたい。」「かっこいい年長になりたい。」と憧れをもつて語り継がれるT君ですが、入学して間もなくしよんぼりと保育園を訪れました。「字、下手だから、消して書き直しなさいって言われる。」「間違って切り落としてしまった折り紙、テープでくっつけてもダメっていわれた。捨てなさいって言われた。」と言うのです。大きな瞳をきらきら輝かせて「勉強して賢くなる」と小学校を楽しみにしていた彼のあまりの変わりように衝撃を覚えました。小学校が求める「力」と私たちが大事にしてきた育ちの姿との間にギャップがあるとすれば、まずは両者の摺合せを行わなければならないと思えました。そのうえで、「新システム」が唱える「準備こそ教育」という教育観が、本当に子どもを育てるものなのか、大いに議論をしたいと思えました。

（朝市センター保育園）



被災地の今とこれから①

学校の再建は 地域の再生とともに

森 達

1. 地域のつながりと防災意識、家族思いの中学生

荒浜中の在籍生徒148名が全員無事だった理由を「地域のつながりと防災意識が放課後の子どもたちを救った」と、河北新報は報じた（2011年12月18日付け）が、それに加えて家族思いの生徒が荒浜中には多いことも教訓として挙げられると思う。3・11当日の様子をA君（中3）は次のように教えてくれた。友だちのお父さんの制止を振り切つて、A君は自分の判断で海沿いの自宅に戻つて家族を避難させている。

3月11日、それは雪がちらりと降るとても寒い日でした。その日は、1つ上の先輩たちの門出を祝う卒業式。そんなこともおかないなしに、この3月11日、多くの人の家族、友だちや大切な人を無残なことにたつた1日で奪い去ってしまいました。僕は卒業式後に先輩たちと近くのカラオケに行きました。

入った直後の、3時になる少し前、ドンとあたり一面に響きわたる大きな音とともに、たてよこへ大きく揺れるマグニチュード9.0、最大震度7強の大地震が東北を襲いました。立っていることもままならず、3分間という長さに、周りの人の叫び声が、今でも頭に残っています。

しかし、この地震で恐ろしいと僕は思いませんでした。なぜなら地震なんかより恐ろしい大津波が、頭の中をよぎったからです。小さいころからおじいちゃんに、「地震が来たら津波が来る。早く高台に逃げろよ」と、地震が起こるたびにいわれていました。

地震が起きたとき、海沿いの僕の家では、おじいちゃんとおばあちゃん、インフルエンザで学校を休んでいた妹がいました。ぼくは心配で、勢いよく店を出て自転車にまたがり、自転車が壊れてしまう勢いでペダルをこぎました。友だちのお父さんに車ですれ違い、「海の方にはいくな、逃げろ」と強く言われたのですが、ぼくは家族を助けたいという気持ちが強く、ペダルを踏むのを止めませんでした。

家に着くと妹が泣きべそをかいてこっちにきました。おばあちゃんを腰を抜かしてしまっていたので、ぼくは周りに助けを求めに走り出しました。しかしもう、誰もいなく、ぼくはその場で泣き崩れてしまいました。「家族を結局助けられなかった。今までこんなに迷惑かけてきたのに、ごめんね」と、自分の力の無さに泣いてしまいました。しかし、泣いてうずくまっていた自分の耳に、聞き覚えのある車のエンジン音がし、周りを見回すと、友だちのおじいちゃんが車でちょうど避難しているところでした。「助かった」と、全身の力が抜けるように安心しました。

おじいちゃん、おばあちゃん、妹を避難させ、ぼくは車の後を追うように、自転車をこぎました。

2. 学校再建に向けて寄せられた保護者の意見

昨年9月、亘理町教委は「津波による浸水は2m以上であり、被害が大きかったことから、現在の敷地に盛土をし、高床式のよな構造で校舎を再建する」という原案を示し、復興計画に反映させるために保護者を対象に「学校復興に関する意向調査」を行った。

この意向調査には賛否両論が寄せられた。

* 中1の娘を通わせています。今のところ、この2、3年荒浜での再校はないと考え、卒業まで逢限間借りでお世話になろうと思つておりました。しかし、現在6歳の娘（未就学）はどうしたらよいかと頭を抱えております。私の意見としてはどうしても荒浜の地にある小学校に通わせたくありません。いくら荒浜小の浸水が60cmだったとしても、1000年に1度の津波であったとしても海の方に向かって、東バイパスを越えた海側に娘を見送ることができません。H25年4月には再校する雰囲気です

が、再校予定時期はいつか知らせてください。堤防工事前にも学校再校はあり得るのですか。情報開示をお願いします。

* 学校の移築も案としては賛成したいと思うところですが、被災地から子どもがいなくなると、今後荒浜や吉田浜の地域の活性が衰退し、地域産業に大きな支障が出てくると想定されますので、今後の町復興にかけても長い目で将来を見据えて、学校を再校した方がよろしいかと思えます。

* 災害に対する安全な学校づくりと1日でも早く学校を再建し、再開してほしい。いつまでも仮校舎ではなく、母校である荒浜中学校で学校生活を早く子どもたちに送らせてあげたいし、思いつくつくってほしいと願っている。

亘理町はこの他にも町民との意見交換会を実施し、昨年の12月議会で復興計画を策定し、2年後の9月に荒浜中を再校することが正式に決まった。

3. 荒中生の次世代に残したいことは、消えてほしいことは
この春卒業を間近に控えた中学3年生に、荒浜中の次の世代に残したいことは、消えてほしいことはをそれぞれ挙げて、理由を書いてもらった。

次世代に残したいことばとして挙げられたのは、「協力」「絆」そして「ありがとう」だった。消えてほしいことばとして挙げられたのは、「頑張れ」「死ぬ」「無理」「めんどくさい」「ウザイ」だった。

これらの文章をつなぎ合わせて読んでいくと、そこには彼らが理想とする学校像や生徒の姿が示されているように思える。協力と絆を大切にしながら「ありがとう」という感謝の気持ちを忘れない荒浜中。「死ぬ」とか「ウザイ」に象徴されるようなじめじめを克服し、「めんどくさい」と投げやりになったり、「無理」ということばに象徴される諦めを排し、物事に積極的に挑戦していく中で自らの可能性を切り拓いていく荒中生の姿が浮き彫りになってく

る……。

4. 学校の再建は地域が再生してこそ

夏休みの初日、防災集団移転促進事業に関する住民説明会で、災害危険区域に指定された宅地の買い取り標準価格が示された。買い取り価格は1㎡あたり1万6000円〜1万40000円。代替地の分譲価格は、1㎡あたり2万7000円。荒浜は40%の地区が災害危険区域に指定されている。

1200世帯あつた荒浜で、現在居住しているのは280世帯。災害公営住宅も含めて、どこに、どのような形で住むのが喫緊の重要な課題になっている。放射能の影響で漁業も多大な困難を強いられている。海苔養殖業を営む家庭の被害額は2億円を超えるという。津波に飲み込まれた水田の除塩作業も功を奏しているとは言えない。いちご農家の再建には復興庁が待ったをかけた。3年後の予定である。荒浜の復興はまさに緒に就いたばかり。息の長い取り組みが続いていくことになるが、構造改革型の上からの「復興」ではなく、住民の合意を得ながらの復興を目指して力を合わせていかなければならない。

15億円を投じて校舎を建てれば学校を再建できるわけではない。生徒たちの成長空間としての地域づくりとあわせて、昨年の3年生が思い描いたような学校を再建できたとき、20年後になるか、それとも30年後になるか、それはわからないが、「自分が中学生のときに未曾有の大震災を経験して何もかも失ってしまったけれど、全国からの温かい支援があり、仲間と力を合わせてそれを乗り越えてきたからこそ今の自分がある」とふりかえられる日が来るのではないか。



被災地の今とこれから②

父そしてフクシマ

勝 然 たみ子

―父のこと―

父は90歳で、大震災当日は、隣町のショートステイ先から戻る予定でした。安否確認が取れず、施設にも近付けない状態でしたが、4日後、大分水が引いたので父を迎えに行くことができました。幸い施設が2階建てで、父は職員の方々に守っていただいたので、比較的元気に帰宅できました。

余計な苦勞をしないようにと、十年前に水洗トイレに直ししました。限界集落と呼ばれるこの地域では下水道設備も整っていないので水洗トイレにしている家はほとんどありません。

大震災直後は水洗トイレが却って大変で、父のトイレをどうするかがまず課題でした。考えたのは夜、寝室に置いているポータブルトイレを昼、居間に近い廊下に移動することでした。匂い対策として普段から使っていたボカシが役立ちました。玄関から見えないように大きな風呂敷でカーテンのように仕切りを作りました。それから、間に合わないで汚してしまっただけの始末も課題でした。山水がありましたがかやはり貴重でした。そこで、これもやはり普段から使っていた重曹と少量の水で汚れた下着を洗いましたが、すぎは省略しました。食べ物も少なく貧しい食事だったので幸いして汚すと言ってもおしっこだけで助かりました。また、学校が避難所となりましたが、交代での勤務となり、家で生活の工夫をすることができて助かりました。

―フクシマのこと―

大震災直後、職場で見た新聞で福島原発の事故を知りました。私の家は女川原発から直線距離で15キロ圏内なので他人事ではありませんでした。原発難民となった人々が大混乱のなか、着の身着のまま、夜、バスで見知らぬ土地に移動させられる有様や100歳を越した長老の方々が自殺なさったという悲劇をニュースなどで知った時、本当に自殺するしかないと思いました。高齢者にとって住み慣れた家を出て行けと言われるのは死ねと言われるのと同じだからです。さらに絶望の中での長時間のバスでの移動に両親の世代は到底、耐えられないと思いました。

ですから、福島原発の放射能が風でどの方向に流れているのか、また近くの女川原発が今回の大震災でどうなったのか、どうなるのかとても心配でした。後で聞いた話では、女川原発は首の皮一枚でつながっていたということです。やはり紙一重だったのです。

先日、福島県飯舘村を訪ねる機会がありました。無人の家々を見ただけでショックでしたが、それと共にどこまでも続く緑のじゆうたんが気になりました。農家に暮らす私にはそれが放置された田畑だと分かりました。長年苦勞して耕してきた村の人々にとってどんなに辛く悔しいことか、その無念さを思うと何とも居たたまれない気持ちになりました。

村民6000人の飯舘村では、大震災前まで亡くなる方が年70〜80人だったのが昨年は約倍の137人上ったそうです。また、老人ホームの入居者が例年7〜8人だったのが昨年は48人もいたそうです。

菅野村長さんは痛恨の思いを込めて「放射能災害はゼロからのやり直しができない。心が分断される。」と語っていました。

被災地の復興を考える時、もっとも大きな足かせとなるのが原発事故です。

そこから目を背けては第二のフクシマになる。今、そう思っています。

(石巻・万石浦小学校)

「教師」（須田清著）を読んで

渡部 やす子

これまで須田清氏とえば、「かな文字の教え方」の著者としてしか知らなかったのですが、今回の講座で、彼の内面や、一人の教師・人間としての生き方の一端に触れることができても考えさせられました。戦後教育に携わった教師たちの混乱・悩み・希望・気概といったものが今回の学習でもひしひしと伝わってきました。この講座案内を被災地の中学校教師である小野寺修子さんが引き受け、綿密で分かりやすいレポートをしてくださったことに感謝です。

戦争や軍隊生活がいかに人間性を抑圧するものであるかは想像に余りありますが、須田氏は、「こ



んな教師になりたい」という願いを貫きながら戦後の教育実践を真摯に行った人だったのですね。「教育実践」や「実践書」「文献」の持つ意味や問題点も今回改めて問題になりました。また、これまでも話題になったことですが、書かれている内容や問題というのは実に今日の教育現場に共通するものがあります。50年前に先見性のある方が書いたとみるべきか、我々が進歩しないのだと憂うべきか……。

話し合いの中で心に残っているのは「授業実践のメロドラマ化について」の章です。どんな実践でもそこで満足していたら教師も子どもも進歩はないというのは、分かっているようで難しいことです。特に教育現場では一定の成果を上げたときとされる研究発表があると、「立派」「あれが正解」と本人も周りも納得してしまい、そこから進めません。また良いと思われる実践に出合った場合、そこからどう学び自分のものにしていくかが大事なのですが、中途半端な模倣で終わってしまうこともあります。言い訳やほめ合いではない話し合いや学習の場が、教師には必要だと思います。「メロ

ドラマ化」の「リボンの友情」には参りました。自分もリボン路線ではなかったかと。

クリスマスの出し物で配役争いをするなどキリストの精神に反すると指導されて反省した子どもたちが、発表当日、髪に飾るリボンのない子のために全員リボンを外して踊ったという話には私は感動したのですが、須田氏のこの実践記録は「力作」だが感動の実態とは別個のものとなっており、浪花節語りと評されます。「色気が多すぎたり、現実を見つめる目にキビシサが足りなくて、こうした形になった実践記録を今後メロドラマ教師と呼ぼうや。（略）こうした誇張の多い手法で子どもの行動を評価する事も、子どもの平衡感覚を失わせてしまう基になるんだ。（略）我々がいま一番大切にしなければならぬのは、誇張や拡大解釈なしに一センチのものは一センチと測定し表現し得る技術なのだ。」

もっとも、それにつづく「付記」に「実践記録は仲間同士みんなで励まし合うことを目的に書かれるものです。」「教育実践の記録では、人間の半面の善意を信じて、その面での感動があったときはその善意の裏までひっくり返して見なくても、素直にそのまま歌い上げてよいのではないか」といったアンチテーゼが書かれており、そこにまた共感を抱く自分です。

「異常な忙しさの中でも、感性・理性を磨き表現をする意味」という案内人の小野寺さんのコメントがここで重く強くひびいてきます。

（元小学校教師）

「けん玉」ってすごいんです

渋谷 信賢

✈️「なぜやっているの？」

わたしが学級にけん玉を取り入れてもうすぐ20年になります。もちろん、佐藤周二さん（三本木小）の影響。正確には、周二さんに影響を受けた友人の影響。不器用な私は、昔からけん玉は「できないもの」と思い込んでいました。しかし、おっかなびっくりやってみてはまりました。できなくてもおもしろいのです。できた時の快感がまたすごい。衝撃的でした。ぜひ、子どもたちとやりたい！ はじめはそんな感じでした。

教室でやってみると、すぐに興味を示す子、なかなかやろうとしなかったのにだんだんとやるようになる子、まったく興味を示さない子と様々でした。（これは今でも同じ。）でも、やり続けることで、そのことは様々なことと同じではないかと思えてきました。今の

子どもたちは、ものごとを勝ち負けや損得、プラスマイナスで考えがちです。

だから、簡単そうなことにはすぐ取り組むけども、何か難しい（と思う）ことに直面するとそれを避けよう、逃げようとしてしまいがちです。その疑似体験がけん玉でできるのです。

✈️「なぜできるの？」

変わったこと、新しいことをするには相当な労力が必要です。特に学校という場所では学年の理解、学校の理解（特に校長、親の理解、そして子供の理解が欠かせません。今でこそ「信賢先生Ⅱけん玉の先生」が学年、学校、PTAや地域、そして市内にも浸透。だいぶやりやすくはなりましたが、最初はたいへんでした。クラスで取り組むとなると、自費でけん玉をそろえる、学級通信でやっていること、様子を伝える、懇談会や個人面談、家庭訪問で

も必ず話題にする、同僚にその教育的効果を伝える、大会に出場して好成績を上げるなど、「けん玉はいい！」を知ってもらうことを第一に考えました。学校を異動するときには着任式でけん玉を披露することも重要です。けん玉クラブを作ることも力を入れました。今では教職員評価の教科外の目標にけん玉に取り組むことを書いています。

✈️「なにがすごいの？」

上に疑似体験と書きました。少し大げさかもしれませんが本当です。失敗しても取り返せることを学べるのです。クラスでは週1回のけん玉認定会、いわゆる昇段試験があります。自分の級はクラスに掲示されています。だからこそ、認定会は真剣そのものです。合格して泣く子、不合格で泣く子、教室は受験者の動きにくぎ付けです。合格した子にはその努力をたたえ、不合格の子にはその悔しさが次につながることを励まします。どの子もみな落ちた経験、受かった経験を持っていますから共感できるわけです。そうなれば、「けん玉と同じだよ」と勉強や生徒指導などあらゆることに応用が利くのです。私の3学期の話は、ほとんどが、「けん玉ができればできる」「けん玉よりも簡単な」のオンパレードです。その他、なにがいかと言われれば、





- ① 集中力が付く
- ② 友達を認められるようになる
- ③ 「できないことはためなことではなく、コツがつかめていないこと」だとわかる
- ④ 「やればできる」を体験できる

- ⑤ けん玉1つでだれとでも遊べる
 - ⑥ 雨の日に廊下を走る子がいない
↓余計なことで怒られない
- そして、4月にはけん玉の神様のよう
に思っていた先生が、3月にはみんな
に追いつかれて普通の人になることで、
先生は絶対ではないことを学んできよ
うなら！ と最後に落ちがつくのです。

今年のクラスは？

今年も2年生を担任しています。しかし低学年はどうしてもけん玉が重いので、けん玉積み木や簡単な技中心に遊んでいます。でも、級の認定や「もしかめ大会」などでは厳しくやっています。彼らにとってもまだまだ私はけん玉の神様の存在です。早く追いついてほしいと思っています。

2学期になって休み時間は、わたしがいなくても自由に遊べるようになってきました。こうなると上手な子たちの上達は早いですね。ほっといても大丈夫。問題は苦手な子。やりませんから。ほめてほめてやる気を出させる。できるとやる気が出るんですね。コツをつかませるのが重要です。

最近、気づいたのは、「もしかめ」の重要性。「もしかめ」が上手な子は必ず他の技も上手になる！ 認定会と並行して「もしかめ大会」も随時行っています。

子どもにとっては信賢クラスの1年間のお遊び。でもその1年間でいろいろなことを身に付けてほしいと思っています。
あとはこの中から何人かが全国大会へ行ってくれれば。

(名取・増田小学校)

フォーラム 子どもたちの今と未来を考える part1

今どきの“友だち”事情

とき 11月23日(祝) pm1:30～4:00

ところ フォレスト仙台2F 第7会議室 参加無料

話題提供者 交渉中(中学校教師・保護者・児童館職員・養護教員・塾教師など)

フォーラムは

今、この時を生きる子どもたちの現実から、子育てや教育の営みを捉え直したいという願いから開催します。

子どもの成長に関わる大人たちが、それぞれの「子ども観」を見つめ直しつつ、いつも新たな「子どもの発見」を繰り返しながら、その成長の伴走者となればと思います。

様々な立場から、率直で自由な意見がかわされる「ひろば」となるよう、皆さまのご参加をお待ちしています。

3回つづきの予定です。

主催 (財)宮城県教育会館 みやぎ教育文化研究センター

TEL022-301-2401 FAX022-290-4026



♪さあ 手をとって手をとって 進もうよ♪
「3月11日を生きて」石巻・門脇小・人ひと・ことば」

高橋 達郎

「これは、ただ事ではない」2011年3月11日午後2時46分、大きく長い揺れが学校をおそった。そのとき、1・2年生は下校途中、3・4年生は授業を終えた直後、5・6年生は卒業を前に校舎内外で奉仕作業中……。続々と学校に集まってくる地域住民、足の悪い老人もいる。その後「おー、おーと空気を震わせて得体の知れない大きなものが近づいてくる気配」ブレイの大きな壁が大きな音を立てて近づいてくる。「津波だ！」

この映画は、津波と火災に襲われた石巻市立門脇小学校の3月11日とその後の24時間を子どもたちの作文と教職員、保護者、地域住民の証言によって明らかにしたものである。被災後、数ヶ月が過ぎた門脇小学校、津波の跡が残る教室、焼けたたれたままの教室、そして、子どもたちと住民が避難した日和山公園など、その場所にたつて、地震からの24時間を証言で明らかにしていく。無事避難できた安堵感、家族と再開できた喜びが伝わってくる。だからこそ、会えなかった不安、2度と話ができなくなってしまった深い悲しみ、救えなかった悔しさ、無念さ。それがどれだけのものであるか、私は考えよう。

事件は物事・人間の本性を露わにする。下級生に声をかけ下級生を優先させる上級生たち、子どもたちの優しさ。自分の家族の安否を心配しつつ、目の前の子どもたちを必死で守る教職員の使命感とすばらしさ。自分の子どもだけでなく近所の子どもたちを声をかけ助ける保護者、祖父母。動けない人を安全な場所へ運ぶ人々、火事に襲われた小学校へ助けに来る地域住民のつながり。地域を支え地域に支えられる学校。

「復興」「正常化」で学校を「人材選別の装置」に戻してはいけない。子どもと学校を親たちと地域のものに取り戻す作業、つながりを生み出し人間を育てる場としての学校を創り出していくこと。映画を見ながら、子どもたちの作文と教職員、親たちと住民の話聞きながら、私は強くそう思った。子どもたちは最後に歌う、「光れひかれ美しく」

「ああ手を取って手を取って進もうよ」被災直後から、学校と子どもたち、教職員、保護者そして地域の姿を映画として記録し残そうと考え、この映画を制作した教職員と市民の方々に深く敬意を表します。

(宮教組執行委員長)



【問い合わせ】

「宮城からの報告」

～「ことば・学校・地域」制作委員会

事務局 佐藤進さんまで

(090-2955-7668)

センターの動き

7月

2日 高橋さんに来てもらい、とりあえずホームページの日記だけ掲載できるようにしてもらおう。ブログということになる。他の部分は後日。

9日 10時から東北大での定例打ち合わせ会。
 10日 清岡と宮城大に林和人さんの算数教材法の授業を見に行く。小数の割り算。
 11日 通信次号企画編集を清岡さんにやってもらうことにする。小野寺修子さんに、実践書を読む会の依頼状を出す。

12日 西原典子さんから、神奈川の震災ボランティア報告書を寄贈される。そのグループの一人が、現役の高校長なので驚く。
 13日 事務局会議2時から、5時から運営委員会、これまでになく集まりがよい。

17日 運営委員会欠席者へ資料を送付。
 18日 仲本正夫さんに高校生への公開授業を引受けってもらう。1月20日、これで今年度も高校生への授業はやれることになり、ホッとします。
 20日 登米市米山吉田公民館に行く。2時から善王寺のことを聞く。

23日 通信68号の清岡プランについて話し合う。午後ヤスパース学習会。
 24日 戦後教育実践書を読む会への個人あて案内を送る。
 25日 新しい高校入試制度について話し合う。センターとしてどうとりむべきか頭が痛い。
 27日 事務局会議。今日は、「いま、子どもたちは」について話し合う。
 30日 午後、高橋満さん来室。学校調査についてなご話す。
 31日 修子さんから、4日のレジメを送ってくる。

8日 通信特集・座談会の司会役石田さんとの打ち合わせ。
 10日・11日 第61回東北民教研作業並集会に参加。
 17日 田中孝彦さんから電話。これからのことについて話し合う。
 20日 県教委高校教育課佐々木さんから新高校入試制度についての話を伺う。鎌田元さんから「作文宮城」(創刊号から91年まで)寄贈。
 21日 ソウル大学などの視察団3人来室。瀬成田さんに被災地の子どもを話してもらう。

22日 大阪教育文化センターの視察団15人来室。宮城の被災全般に関わる話を賀屋さんに話してもらう。香川教組委員長・中尾さん来室。
 23日 高橋満さん、打ち合わせに来る。
 24日 事務局会議。「いま、子どもたちは」を中心に話し合う。
 29日 清岡、午前、中学の親の声を聞いてくる。夜、中高現場教師の座談会。
 30日・31日 清岡、塾に話を聞きに行く。ホームページの作業のため高橋さん来室。
 3日 清岡、県教委に通信原稿校正を頼みに行く。午後、ヤスパース読書会。
 6日 登米市吉田公民館に。善王寺地区の区長さんの話を聞く。その後、戸倉中が間借りする志津川川に行き、小野寺校長の話を聞く。
 10日 東北大学での定例打ち合わせ会。教弘済の高橋さん来室、国語実践集編集助成金贈呈式。
 11日 鳴瀬二中に聞き取りの依頼に行く。
 13日 「子どもを語る集まり」の打ち合わせ。
 14日 仲本正夫さんから授業のテーマと高校生への呼びかけ文原稿が、子どもを語る集まりのこと一つ。話題提供者名を残してまとまる。
 18日 仲本さんから授業当日の時間割が届く。

(春日)